

あなたのスキルは社会に役立つ

エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第126回

スキルを活かしパラレルキャリアへ——フクギョウ公務員によるシビックテック

●任意団体 フクギョウ公務員

畫田 浩一郎(ひるた こういちろう)、高崎 百合絵(たかさき ゆりえ)、栗林 正司(くりばやししょうじ)、小川 綾(おがわあや)、納翔一郎(なわしょういちろう)

公務員も今やまちづくりに参加するシビックテックの実践者であり、仕事でもプライベートでも社会貢献や地域を盛り上げる活動が増えています。社会インフラを構築するという意味ではエンジニアと言えるかもしれません。

今回は任意団体「フクギョウ公務員」として、シビックテック活動やテクノロジーの力を活用した事例などを紹介します。

フクギョウ公務員とは

「パラレルキャリア」の重要性がますます増している昨今、国家公務員だけではなく、地方公務員においても「副業」や「複業」を望む公務員が増加しています。本稿では「金銭報酬や副収入を目的としたもの」

を副業、「経験・人脈などを本業に還元できるようなもの」を複業、そして「プロボノを含むパラレルワーク全体を包括したもの」をフクギョウと定義し、おにもこのフクギョウという語を使って話を進めます。

私たちが促進したいことは副収入を得ることではなく、個人の想いやスキルを活かしたセレンディピティ(偶然の出会い)を持続的に作り、経験や人脈を本業にも還元することです。やがてフクギョウが公務員においても当たり前の働き方になると信じています。

私たちフクギョウ公務員は、未来のまちのために、自分自身が培ったスキルや能力をβ活かすフクギョウを促進しています。まちづくりやボランティア活動に参加することはフクギョウへの第一歩として大事なことです。スキルを持つ個人の参加を促進し、

◆図1 公務員フクギョウ活動キックオフミーティング



かつ、持続可能なものとするため、私たちは個人のスキルや能力に対して報酬が受け取れるしくみづくりや意識醸成を目指し、活動を開始しました(図1)。

公務員がフクギョウ……！？

地方創生^{うた}が謳われている現在、フクギョウをする公務員が増え、さまざまな地域活動や民間企業との共創活動が活発化することが、今後の地域活性や地方行政政策に大きな影響を与えていると考えています。今や多くの地域で人口が減少し、地域活動の担い手不足が恒常化しています。

「安定している公務員がフクギョウ！？」と疑問に思った方もいらっしゃると思いますが、こうした状況を打開するために、さまざまな能力を持った公務員たちが持続的にまちに還元することによって、地域活動の担い手不足解消だけではなく、その地域ごとの適切な政策の提案や、デジタルトランスフォーメーション(DX)推進にもつながっていくのではないのでしょうか。

フクギョウ公務員は、公務員による善意のボランティア精神だけに頼ることのない、持続可能なしくみとしてフクギョウ促進の流れを作っています。たとえば、上司や人事課に相談・報告をする際のガイ

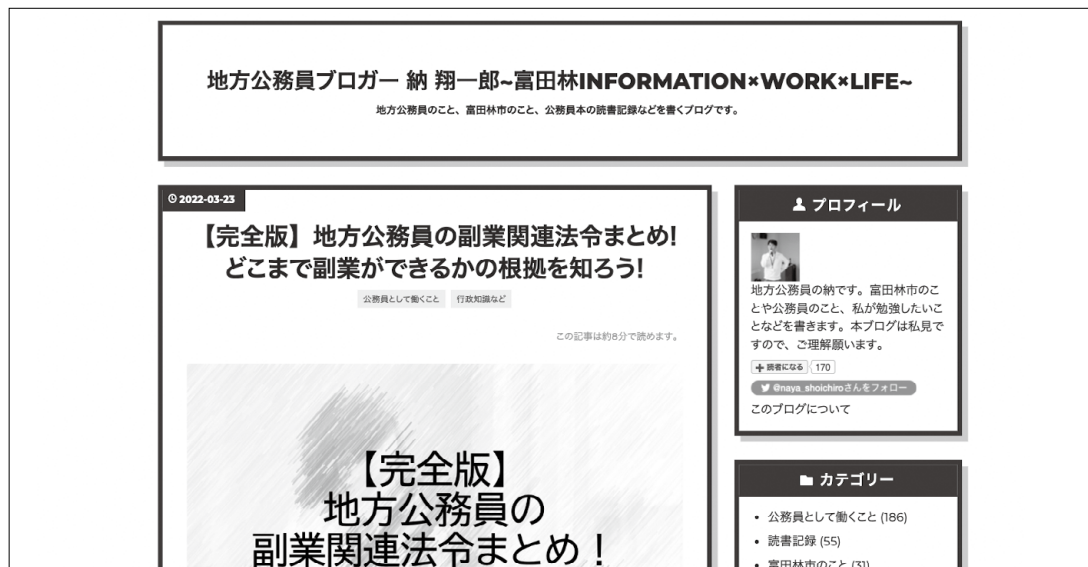
ドラインを調査・整理したりしています。

公務員のフクギョウを発信する

みなさんは公務員のフクギョウと耳にして、どのような感覚をお持ちでしょうか？ 多くの人が「やってはいけないこと」と認識しているかもしれません。しかし実際には、禁止ではなく制限されているだけなのです。たとえば、地方公務員においては、地方公務員法第38条には「営利企業等の従事制限」という法令があります。この法令にもあるとおり、公務員のフクギョウは、あくまで制限されているだけです。つまりフクギョウは、首長などの任命権者の許可を受ければ行うことができるものです。

しかし、このような法令知識や、全国各地のフクギョウの事例がうまく世の中に共有されていないことから、いまだに公務員のフクギョウはやってはいけないものと誤解されています。その理由として、フクギョウに関連した公務員の処分報道の増加が関係していると考えられます。近年話題になった報道事例としては、市長の許可を得ずに市職員が飲食店でアルバイトをしたことによる懲戒処分(2021年)や、消防士が動画配信サイトYouTubeへのゲーム実況投稿で収益を得たことによる懲戒処分(2022

◆図2 地方公務員ブロガーとして情報発信





年)などがあります。これらの報道がSNSやWeb媒体で拡散されることで「公務員はフクギョウをしてはいけない」という認識が強まっているのかもしれない。

そのため、私たちフクギョウ公務員は、公務員業界におけるフクギョウの現状と課題の整理を行い、ブログやnoteなどを活用した情報発信(図2)^{注1}による先行事例や議論・活動の可視化を行っています。それらの情報発信により、公務員業界全体へフクギョウに関する正しい知識などの普及・啓発に努めています。また、将来の展望としては、行政向けの雑誌への寄稿や書籍化なども1つの目標としています。

単なる窓口や法律に定められた許認可業務をこなすだけではなく、「市民や民間企業との共創によって社会をつくる」という意識がすべての公務員に根付くことを願っています。

グラレコによる対話促進のスキルを本業にも地域にも

グラフィックレコーディング(グラレコ)をご存じでしょうか? 会議や議論、講演会などをリアルタイムに可視化する技術のことです。筆者(小川)は公

務員をしながら、「『オヤクショコトバ』をわかりやすく」を目標に2021年からグラレコの活動をしています。グラレコは模造紙やホワイトボードに描かれることが一般的でしたが、安い価格帯のiPadモデルの発売や、コロナ禍でのZoomの広まりなどの追い風を受け、デジタルでのグラレコの認知度や需要の高まりを感じています。

グラレコは、古くは1970年代にアメリカ西海岸を中心に住民参加のまちづくりや非営利組織の話し合いで用いられたのが始まりと言われています^{注2}。公務員がグラレコの技術を身につけることで、地域資源の掘り起こしや対話の場での活用が期待できます。筆者(小川)自身、地域活動などでグラレコを描いており(図3)、住民の方から「概要が一目で見返せてありがたい」などうれしい声を多くいただきます。公務員がフクギョウをすることで自身のスキルアップ、ひいては地域活性化の一助になると考えています。

パラレルワークに挑み、身につけたスキルを社会に還元

公のために黙々と事務作業を行い、いわゆる「お役所仕事」と言われるようなルーティンを淡々とこなす。公僕という言葉があるように、公務員のイメージは長年このようにとらえられてきたように思

います。ところが加速する情報社会の中で、公務員だけが変化を避け、新しいツールやサービスから逃げ、前例を踏襲する意識に染まった「浦島太郎状態」でよいのでしょうか。社会にイノベーションを起こしていくには、許認可や法規制、制度創設の権限を持つ行政から、変わっていかねばならないと強く感じます。

しかし、その組織を構成する公務員が硬直的な思考で変化を嫌う

◆図3 フクギョウ公務員の目指すビジョンをグラレコ化



注2 出典:清水 淳子 著「Graphic Recorder 議論を可視化するグラフィックレコーディングの教科書」、ピー・エヌ・エヌ、2017年

のはなぜでしょうか。国民や市民から預かった税金を使うため、慎重にならざるを得ないからとも考えられますが、そのほかにも圧倒的な経験不足が影響しているのではないかと筆者(高崎)は考えています。

近年では、IT・デジタル分野の専門家やアドバイザーなど外部人材の積極的活用や、民間企業への職員派遣など、組織によっては新しいものを取り入れる文化や風土が作られつつありますが、いまだに手書き・印刷・押印のしくみから抜け出せていない組織が大半です。外部からIT専門人材をアドバイザーとして取り込んだり、一時的な研修に職員を送り込んだりする程度では、これまで築かれてきた強固なお役所文化を取り除けていないのが現状です。行政の内情やしくみを十分に理解し、かつ許認可や法規制、制度創設などの権限を持った行政内部の人材にこそ、新しい情報に触れ、事業を起こすなどの実践経験を積んでもらうことが必要なのです。現状に留まらずチャレンジをし、身につけたスキルや経験を活かして社会に価値を提供できる公務員が今後求められてくるのではないのでしょうか。

その1つのきっかけになるのがフクギョウだと筆者(高崎)は考えています。前述のとおり、自身のスキルを活かしてブログや書籍の執筆をしたり、デジタルツールを使いこなしてグラフィックレコーディングをしたりと、すでに活躍されている公務員の方はたくさんいますが、法令の縛りに加え、活動できる範囲や収入の受領可否の判断が組織によりまちまちで、挑戦の機会が制限されているというのが現状です。公平・公正を謳う存在でありながら、挑戦の機会は平等でないという行政の抱える矛盾を解消し、誰もが挑戦できる社会を実現すべくフクギョウ公務員は活動を進めています。

新たな時代の潮流を作る

noteやブログなどによるライティング活動から雑誌への寄稿や書籍の執筆活動に発展したり、グラレコの活動することでイベントや対話の場に必要不可欠な存在として依頼を受けたりなど、スキルを報酬に変え、さらに自身のスキル向上にもつなげて

いる人たちが少しずつですが増えてきています。こうした活動はシビックテックでもあると筆者(晝田)は考えています。公務員も一市民であることには間違いありません。また、シビックテックという新たなアプリ開発やRaspberry Piなどをつかったモノづくりをイメージされる方も多いかもしれませんが、私たちは「課題解決のために既存の便利なサービスを活用する」こともIT・テクノロジーの活用やシビックテック活動として幅広くとらえています。

ほかにも、アプリ開発の発表会をグラレコで紹介するといったことも行っています。フクギョウ公務員にも「Code for X」^{注3}に所属しているメンバーがいるほか、筆者(晝田)自身も市役所に勤務していた2017年にCode for AICHIを新たに立ち上げ、活動しています。

本連載の第124回「シニアプログラミング発表会！」^{注4}の取り組みをきっかけとして、エンジニアやグラレコ担当者として幅広く関わってきたいというフクギョウ公務員のメンバーも増えてきています。2022年4月21日に開催された2回めのシニアプログラミング発表会でも、フクギョウ公務員によるグラレコを通じたコラボレーションが行われ、現役公務員も多数参加していました。「デジタル・ディバイド」(情報格差)の対策を行政が実施していますが、このようなイベントから、シニアのセカンドキャリアやデジタル活用促進の担い手育成の環境整備につながるかもしれません。

おわりに

今回、公務員のフクギョウにかける想いや取り組みの事例をご紹介しました。まだまだ小さな一歩ですが、制度や意識を変えるためにはこれらの積み重ねが必要です。公務員でさえすでに実践している方がいるので、公務員以外の方でもできるはずで、民間企業で働く方はもちろん、社会を構成しているさまざまな方に、こうしたフクギョウの考え方が広がっていくことを期待しています。**SD**

注3 この「X」には、地域名や活動対象などが入ります。

注4 本誌2022年4月号にて掲載。